

『航米日録』と『広八日記』の比較考察

彦坂佳宣

要約

幕末期成立の2つの米・欧見聞記、『航米日録』と『広八日記』という知識人と庶民による資料を言語文化的な見地から比較考察した。まず、計量テキスト分析の「対応分析」「共起ネットワーク」で、旅程と関連語群の分布から、地域と見聞・体験内容の特徴を見た。次に「驚く」「機巧・奇巧」「言いがたし」など頻出評価語から、「蒸気車」などに代表されるその対象物と表現特徴を比較し、『航米日録』が漢語表現に長けて観察・記述的、『広八日記』は日常和語による印象・概言的傾向があるとした。また、近代日本語成立前夜の資料として、「日曜日」「宿屋」「ドル＝貨幣単位」「瓦斯」などの語形式の各様一特に語種、使い分け、定着度一を考察し、やがて近代語へと整理される過渡期の模様の一斑を見た。

Keywords : 『航米日録』, 『広八日記』, 計量テキスト分析, 表現比較, 近代語前夜

1. 幕末期に表された二つの記録「航米日録」と『広八日記』

幕末期には公私を含め、かなりの米欧見聞記が存在する。本稿はそこから、『航米日録』と『広八日記』を取り上げ、言語文化的な視点から比較を試みるものである。これらの資料は、明治になって西欧の文物が本格的に流入し今日的な言語文化的な状況になる、その前夜のものであり、しかし既に準備は始まっていた。こうした時期に、直接、欧米を体験した者たちの記録にどのような様相が現れてくるかを考えてみようとするのである。

『航米日録』は、万延元年（1860）日米修好通商条約の批准書交換のため幕府が米国へ使節団を送った、その長に扈從した旧・仙台藩士、玉虫左大夫による記録であり、漢学に長けた武士階級の知識人によるものである。『広八日記』は、現・福島市飯野町出身の一庶民による米欧曲芸巡業日誌である。経歴は不明ながら、青年期前後に江戸に出て、45歳の時、慶応2年（1866）から2年間にわたってリズレー教授なる人物に率いられ、通訳ベンクツが伴い、米欧を巡業した際の記録である。両者の年代差はわずかに数年である。これら性格を異にする記録から、海外事情に疎い時代に、彼らが米欧で何を見てそれをどう表現したか、比較考察を試みる。幕末期は、やがて明治期の近代言語文化的な様相へと連続する前夜である。その模様の一斑が見て取れよう。

考察に用いた本文は、『航米日録』は岩波『日本思想大系、第66巻 西洋見聞記』所収のもの（以下、「思想大系本」、用例の所在もこの巻、頁数で示す）である。この本文は善本とみな

される所蔵元の異なる巻から構成されている。玉虫には自筆本（仙台市博物館蔵）もあるが、定本的なものではなく、各地にある転写本も校異がある。本稿は大局把握の目的として、上の思想大系本を使用することとした。なお、この記録の価値については、同書にある沼田治郎・松沢弘陽、2氏の解説、また佳知晃子監訳（1984）マサオ ミヨシ『我ら見しまに一万延元年遣米使節の旅路』などを参考にした。

『広八日記』の本文は、飯野町の高野家に蔵されている原本をもとに、以下の史談会のもを参考にして彦坂が調整した（用例の所在は翻刻頁と、念のため年月日条で示す）。この日記は、まず飯野町史談会による『広八日記—幕末の曲芸団海外巡業記録—』（1977）によって紹介され、のち2005年『飯野町史』第3巻に再翻刻がなされている。前者にも解説があり、後者にはさらに専門的な芸能史研究の三原文、国語学の山本淳、2氏の解説があり参考になる。この間に、安岡章太郎（1984）『大世紀末サーカス』（朝日新聞社）で詳しく取り上げられ、前後して先の三原文（1990, 1994）など、またこれをかなり参考にした点もあると考える宮永孝（1999）があり、米欧での興行の経緯や内容、また行程の追跡などが行われている。この時代の庶民による海外記録は珍しく、興行を通じて現地で体験した事柄が候文の中にいくらか方言調のまじる自在な言葉で書かれている。その内容や方言性については彦坂（2003）他で取り上げたことがある。

こうした知識人による『航米日録』と庶民による『広八日記』とを比較し、その文体からして雅・俗的表現の違いを含む表現模様を観察し、あわせて明治以降のいわゆる近代日本語の前夜の状況を考えてみるのである。以下、『広八日記』、『航米日録』の順に、その見聞内容のあらましを見て、続いて両者の表現上の差異につき幾つかの事項に分けて検討する。

なお、用例はおおよそ原文のままとし、必要に応じて丸カッコ内に彦坂の注を加え、その所在は『航米日録』は翻刻の巻と頁数、『広八日記』も飯野町史談会の翻刻頁、また念のため日記の年月日条を加えた。

2. 二つの記録の内容

2つの記録の見聞内容を把握するのに、樋口耕一氏（立命館大学産業社会学部）のKH Coderによる計量テキスト分析プログラムを使用し、旅程とそこに現れる特徴語を取り出すことから始める。準備として、本文のテキストファイル化、これをKH Coderに読ませ、形態素分析をし、続いて以下の各種整理をし、その意味を読み取るものである。

KH Coderによる品詞認定については、連動して動く「茶筌」が短い単位を主とするため、KH Coder付属の「複合語検索機能」を使って主要な複合語を洗い出し、かつ資料通読により必要と思われる語を追加し、これらを保持する形で形態素分析にかけた。その点で、記録内容に即した語形成要素が取り出せたと考える。しかし、一方で膨大な語彙群であり、形態素分析にもかなりの誤りがあり、目視の訂正を徹底させることは困難であった。形態素分析の誤りの1つの要因は、両資料とも幕末期の古文を主体とすること、今日なら平仮名表記が原則のものが、「其」「此」などを代表としてなじみのない漢語表記も多いこと、当て字表記も混じることなどのためである。この点で、品詞認定にはなお誤りもあるが、当面の目的を果たすには十分のレベルと考えている。

2.1 『航米日録』の見聞と内容

上述の作業を経て、『航米日録』の各種特徴の図示をおこなう。まず、KH Coderの「対応分析」の結果を図1とした。これは、全資料を行程により7部に分け、そこに現れる関連単語を抜き出して配置したものである。なお、この記録の総文字数は約14万2千強である（ワードプロセッサ「ワード」の字数算定による）。

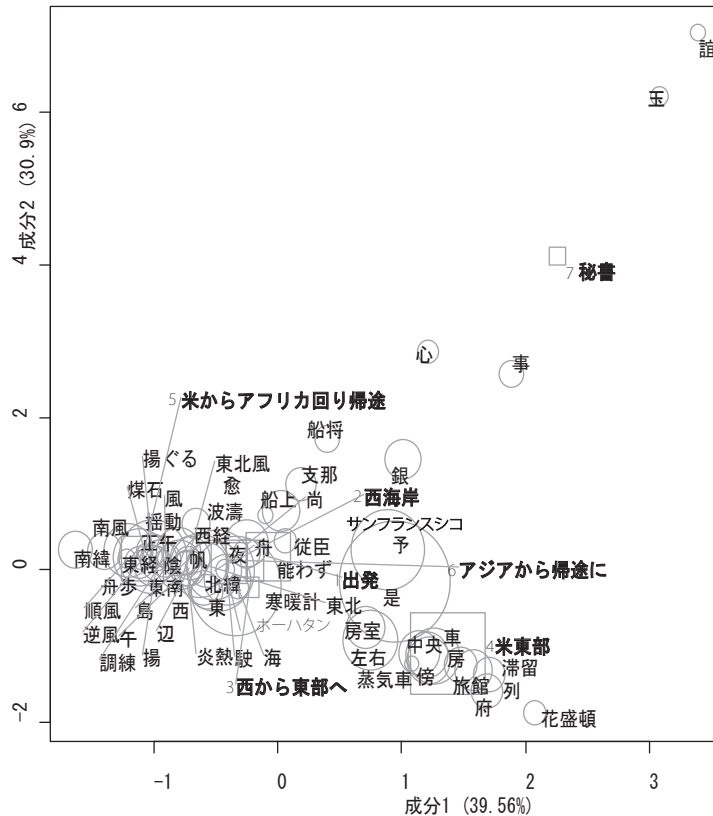


図1. 『航米日録』対応分析

最小出現数20語、上位60語、269語表示

図1は「対応分析」の図である。7つの旅程に分けており、その特徴語が配置されている。旅程は次のように区分した。

1. 「出発」・・・江戸からサンフランシスコ到着までの主として海上の記述部分
2. 「西海岸」・・・サンフランシスコの様態
3. 「西部から東部へ」（図では「西から東部へ」）・・・サンフランシスコを出帆し、「パナマ国」を蒸気車で抜け（当時、パナマ運河は未開通）、ワシントン付近までの船旅
4. 「米東部」・・・ワシントン・ニューヨークなど東部都市の検分
5. 「米からアフリカ回り帰途」・・・大西洋を横断しアフリカからアジアへの航海
6. 「アジアから帰途に」・・・東南アジアから日本に帰る
7. 「秘書」・・・筆者・玉虫が旅程を通じて得た所感をまとめたもの。率直な意見が披瀝され、

公にはされなかったもの。

これを念頭に図1をみると、大きく旅程の配置は3つに別れる。まず、図右上の「7. 秘書」が最も離れて個性的、次には右下の「4. 米東部」であろう。対して、図の左下に固まっている「1. 出発」「5. 米からアフリカ回り帰途」「6. アジアから帰途に」の航海中の部分はよく似ている。これらからやや離れた「2. 西海岸」と「3. 西から東部へ」はこれらの中間位置にある。このことは、配置された語類によって了解されよう。図1の作成は「最小出現数 20」、「差異の顕著な語上位 60」の条件で表示されている。やや細かな語数レベルとしたので煩瑣であるが、一方では共通するものと外れるものとが明らかである。

まず、他と離れて最も特異な「7. 秘書」では、「心」が次のように使われている。

1. 此次ノ米行ハ我国剖判以来未曾有ノコトニテ、彼国ニ行キ威焰ヲ示スハ第一ノコトナリ。……此ニ来リ俄ニ奢侈ノ言ヲ発シテ美味ヲ好ムハ是何事ゾヤ。嗚呼、万里ノ波濤ヲ涉リ来レバ、縦ヒ上ト雖ドモ幾許ノ蓄ヒアルベキヤ。万一危難ニ逢ヒ日数ヲ積ミナバ、何ヲ以テ食トナサン。是ヲ考ヒナバ、一粒タリトモ捨ツルニ忍ビズ。況ヤ日本魂ノアル者外国ニ来リ、拘々トシテ飲食ノ小事ニ管繫スベキノアランヤ。若シ是アラバ、其心ノ鄙劣以テ知ルベシ。陸上ニ至リテモ、皆是ニ准ジテ其恥辱ヲ顕サバ、剖判未曾有ノ快事モ却テ不快事トナルベシ。長大息セザルヲ得ンヤ。巻8, 237 頁
2. 今彼ノ精勤、且互ニ相助ケ励ムヲ見レバ、人ヲシテ心ニ恥ヂシムルニ至ル。巻8, 240 頁
3. 昨夜水吉兩人病死ス。今日水葬セント其規式ヲ行フ。船将等之ニ臨ミ、悲歎ノ色ヲ顕ハサルモノナシ、其親切我子ノ如シ。是ニ於テ彼国ノ益盛ンナルヲ知ル。何トナレバ、上下相親ム如此ナレバ、人々化セザルヲ得ンヤ。嘗テ聞ク、合衆国開闢以来叛逆ヲ行フモノナシト。実ニ然ルベシ。我国賤官ノ者死スルナドハ犬馬ヲ以テ待チ、何ゾ其席ニ列シテ弔フモノアランヤ。故ニ上下ノ情日ニ薄ク、却テ彼ニ恥ルコト多シ。今彼ヲ見テ、誰レカ心ニ恥ヂデランヤ。巻8, 241 頁

1. は日本使節団の「心」の狭さを言い、2・3も同じであるが「彼＝米国（人）」と比較しての反省である。また、「事」は上の引用の「小事」としても出るが、ハワイ島で出会った広東人「麗邦」との筆談で彼が玉虫に問う、「近聞、貴国与英夷有争鬪之事。先生審知之否」の話題提示に使用されている。なお、右上の「玉誼」は筆談末の玉虫の名である。

次に「4. 米東部」の語群は次のようなものである。「花盛頓・府」は首都ワシントン、「車」「房・房室」は馬車、各所の部屋の説明に現れるものである。「中央」などは建物、室内、置物などの位置。「滞留」は船の進退さままでであり、また当初ニューヨークを目指すがワシントンに変更があり、滞留したのである。

次に、やや左下の「3. 西から東部へ」については、途中まで蒸気船艦「ポーハタン」で行き、パナマは「蒸気車」で越えるのである。「房室」などは船室の記述であるが、これは他の場合にも適用される。

最後に、左下に固まってある中で「1. 出発」は「サンフランシスコ（玉虫表記）」、「ポーハタン」など目指す地名と船名、「能わず」などは船の揺れや暑さに耐え難いこと、「2. 西海岸」はサン

フランシスコの様態である。残る「5. 米からアフリカ回りの帰途」で「南緯」「炎熱」があり、「煤石」は石炭のことで、途中で不足して困ったのである。また「6. アジアから帰途に」でも航海、位置関係、時刻などの関連語が見える。以上のような概要である。

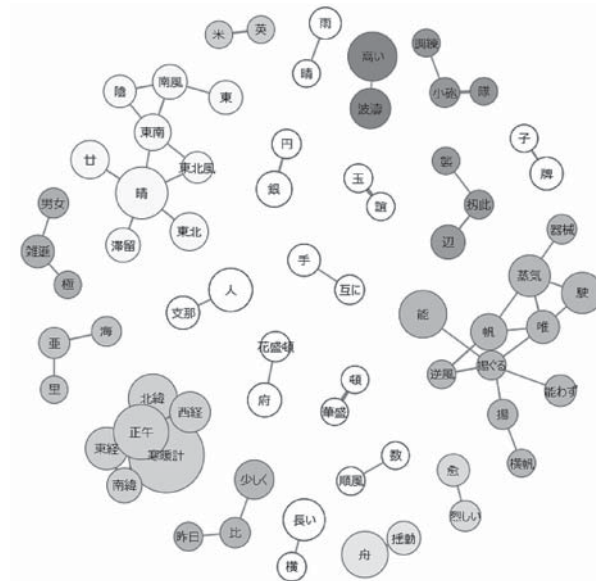


図2. 『航米日録』共起ネットワーク

最小出現数 20、描画数 90

次に、どのような単語同士の関連があり、その強弱をどうかを「共起ネットワーク」で見る。多くは航海に関連する語の集合であり、まず大きな固まりの、左下「正午」「寒暖計」などは方位・時刻・温度、左上の天気（「晴れ-陰（曇り）」、風の方向や進み具合が固まり、その右の「波濤・高い」「晴-雨」など、右側やや下では航海の動力の「蒸気」か「帆」で走るか、「能」はそれが「逆風」などで「能わず」の場合が多い。下部の「船-揺動」もこれである。その左では「昨日-に-比べて-少し・・・」の航海の様子などがある。やや小さいまとまりでは、左の「男女」「雑遊-極む」は各地で日本人使節団を見ようとする群衆、真ん中の「手-互いに」は人間関係の「手を取り合う」、やや中央下の「花盛頓-府」はワシントン府（「華盛頓」もこれであるが、分析が徹底していない点が出た）、「円-銀」は大円銀でドルのこと—こういった集合模様である。なお、作図には語の最小出現数 20 と低めにしたが、それでも航海関連の語彙が多く、見聞内容にかかわる点は少ない。見聞は多岐にわたり、使用度の高い語が少ないためであろう。参考までに言えば、玉虫の記述は「○○形勢」という見出しで、極めて多岐にわたりかつ詳細である。この点の一端は第3節で示す。

「クラスター分析」

図示はしないが、簡単にクラスター分析にもふれておく。一定頻度以上の語を関連の強い語群の組に分けて示すものである。やはり航海関連の語群が多く、これは略す。他では下位にあ

る「大-云う」は、印象的な事柄の夥しい伝聞記録で、前項の「大」は「大抵」「大いに」また後項の「云」は「・・・と云う」である。「大円銀」「我が国」「今」などの組は日本と米国の今日的なありよう、特に「円銀」つまりドルの力を意識している。玉虫は米国での物価を逐一「円銀」その他の単位で記録し、またその価の高さに驚き、日本の小判との金の含有量などの比較にも言及している。多岐にわたる観察である。

2.2 『広八日記』の見聞と内容

同じ方法で『広八日記』の場合を見る。この日記の総文字数は約3千百強である（ワードプロセッサ「ワード」の字数算定による）。

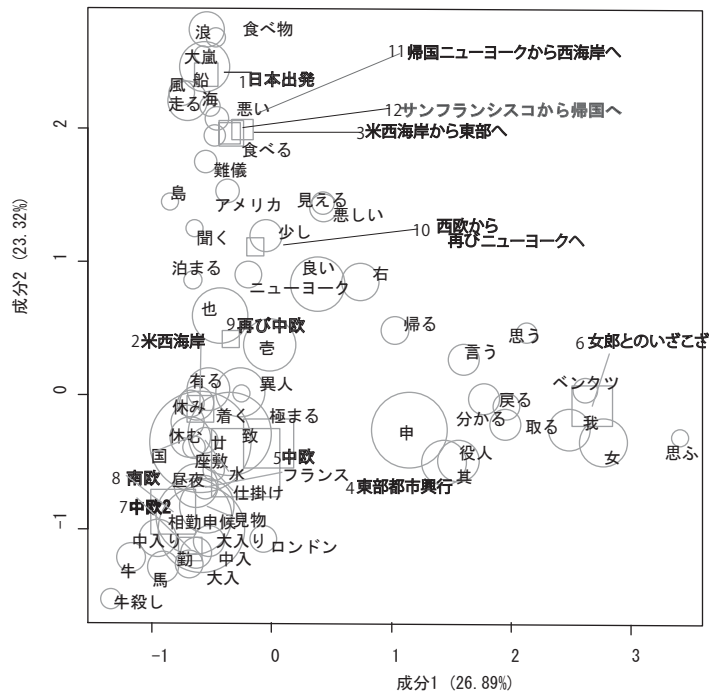


図3. 『広八日記』の対応分析

最小出現数 10,174 語表示

旅程は次の12に分けた。その内容も添えておく。各地を往来するため幾らか複雑になった。

1. 「日本出発」・・・横浜港からサンフランシスコへの航海
2. 「西海岸」・・・サンフランシスコの様態
3. 「西海岸から東部へ」・・・サンフランシスコからパナマを経て東部到着まで
4. 「東部都市興行」・・・ワシントン・ニューヨークなど東部主要都市巡業
5. 「中欧」・・・フランス・イギリス・オランダなどでの巡業
6. 「女郎とのいざこざ」・・・イギリスでの警察沙汰と裁判
7. 「中欧2」・・・5の続き

8. 「南欧」・・・イスパニア・ポルトガルでの巡業
9. 「再び中欧」・・・フランス・イギリスなどの巡業
10. 「西欧から再びニューヨークへ」・・・中欧から大西洋を渡り米東部への航海
11. 「帰国ニューヨークから西海岸へ」・・・米東部からパナマ経由サンフランシスコまで
12. 「サンフランシスコから帰国へ」・・・サンフランシスコから日本への航海

図3. 「対応分析」は旅程に即して各種語群が集まっている。まず、大きくは、(Ⅰ) 左上にある幾つかの航海部分－旅程1, 11, 12, 3, (Ⅱ) 右側のロンドンでの「6. 女郎とのいざこざ」が特徴的である。対して左下では(Ⅲ) 欧州部分が集中している－5, 7・8。 (Ⅳ) 「2. 米西海岸」「9. 再び中欧」, (Ⅴ) 「4. 東部都市興行」は、(Ⅲ) からやや離れ、それぞれ (Ⅰ) と (Ⅱ) の中間的な位置にある。

これを具体語群で見ると、(Ⅰ) の航海を主とする「日本出発」「米西海岸から東部へ」「帰国ニューヨークから西海岸へ」「サンフランシスコから帰国へ」では、航海の「難儀」「食べ物（吐く）」、「島」「見える」「(船) 走る」などがある。(Ⅱ) 右側のロンドンでの「女郎とのいざこざ」では、「女」を買い、「(巾着を) 取られ」「役人」に「思い」を訴え、「(言い分を) 申し・言い」、裁判で女を罪にする。(Ⅲ) 「欧州部分」では、ホテルの「座敷」「水・(火) の仕掛け」に驚き（前のサンフランシスコでも体験）、興行は「異人」観客の様々の「・・・入り（具合）」の中で、多くは「昼夜」, 「相勤申候」、時には「休み」「市内見物」、また南欧では「牛殺し－闘牛」「馬」も犠牲となる興行に驚く。これらの地域に「着く」「泊まる」、各地の興行前には「役人」に「手見せ」(恐らく芸の事前披露)」をする。こう言った内容である。玉虫が諸事の観察に心を砕いたのに対し、広八は曲芸興行を中心にして、旅程と町見物の体験的な日記という印象が強い。

図4. 「共起ネットワーク」の場合は、際だった特徴語と、基本語彙とに別れる様子がある。特徴語の関連ぶりは、左から「馬車-で-町見学」「船-走る」「此处-興行初日-目出度く千秋楽」、右端の「大入り-相勤申候」、同じく右端のあちこちに行く「蒸気車の道」などが関連語彙である。他は、やや文章作成上の基本語的な感じがあるが、中央、上は説明文「是・・・候」, 「・・・致す」「参る」の文表現の特徴が集まり、また「(西洋諸物の) 綺麗さ」、各地で「日本人」が訪問してくる、などもある。

「クラスター分析」

これも作成したが、上に準じた模様なので省略する。

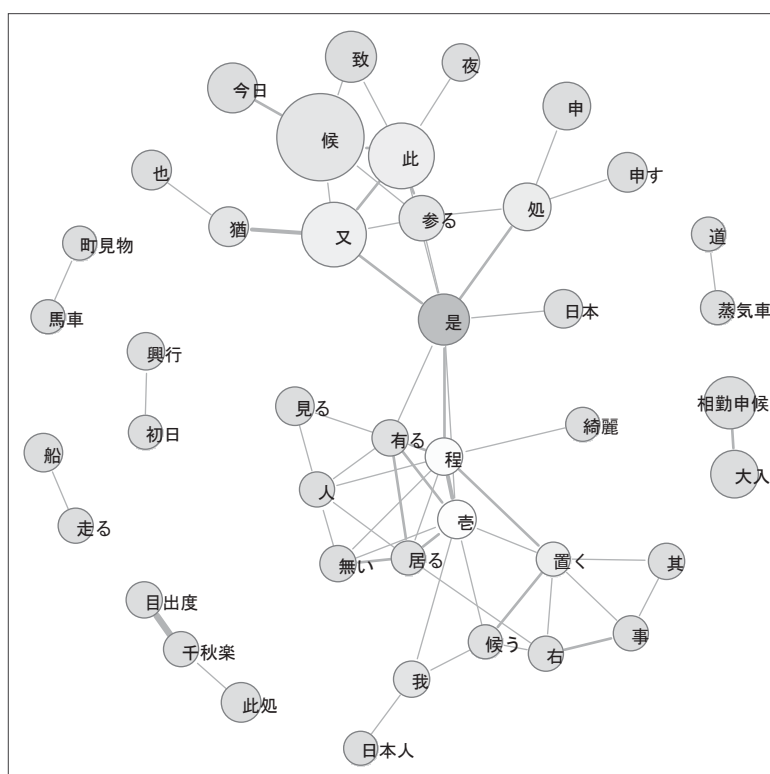


図 4. 『広八日記』 共起ネットワーク

最小出現数 25、描画語数 69

3. 表現比較

3.1 彼らは何をどのように見たか

以上、旅程に伴うおよその内容を語群の配置の点から見たが、もう少し具体的に彼らの見聞を検討する。

両日記には、初めての洋行であり、新しい事柄に接して、「驚く」という表現が頻出し、またその模様を、『広八日記』では「言い難し」とすることもある。『航米日録』はさすがに知的な態度であり、内実についての評価を「奇巧・機巧」他の言葉で表すことが多い。これらが外国の文物・事物に接した際の常套的なことばとして、彼らの態度を良くあらわすものと考えられる。そこで以下、この表現を手かがりに、何を指してそう言い、どのような具体的表現で記録しているかを整理したのが、表1と2である。

表1.『航米日録』の「驚く」「奇巧・機巧」など

「驚く」	「奇巧」	「機巧」-特に「車」	「解する / 記す - 能わず」など
「車」活用の印刷 オアホ港の識字層の存在 国王居室の豪華さ オーロラ 食事への馴れ 迅速な救助行動 桑市付近の寺院群の偉容 「旅館」の施設 - 水道、ガス 灯など 蒸気車の様態・速さ 到着時の歓迎模様 飲食饗応模様 大統領居室 博物所の展示物 宴会舞踏の男女の服装華美 議事堂の展示 東部都市の偉容 石版印刷の妙 饗応の盛んなること フィラデルフィア街並み・ 富商家の飾り付け ニューヨーク商店街の偉容 「禽獣観場」の「手づまの」 巧妙さ ニューヨーク奢侈・家具の 文采・衣服	「写真」 ハワイの金銀細工 蒸気車 ロノーク船大略 風船 「ネヒヤル-軍船製造処」 「ホーハタン大略」 印刷	「馬車」 蒸気による動力—印刷 機械による「縫針ノ業」 蒸気車の「車」の機巧 船中への搬入用道具 「煤石」搬入の車 蒸気車 蒸気船の暗車 ポンプ 紡織所の「車」動力	妓舞の偉容と曲の内容 軍船製造処の蒸気の機構 印刷所の蒸気の機巧の精密さ 議事堂結構の緻密さ 日本コインの金銀含量 演劇の内容 - 言葉分からず 波濤船上会話不可

表2.『広八日記』の「驚く」「仕掛け」など

「驚く」	「仕掛け」	「(言い) ~ 難し」
桑市(サンフランシスコ) 様態 エレベータ 異人「軽業」 大金盗難 「火消し」の装備 軽業で落下 異人との乱闘 仲間の死 スペイン争乱 江戸での「戦—イクサ」	桑市街の様子 「車・水・火」の「仕掛け」 水道 港の施設 エレベータ ホテル食事システム 遊園地の施設 機織り機械 「ハウク」(公園) 施設 ロンドンの劇場 オランダ風車	桑市様態 「ハウク」(公園) の所見カバ - 動物の形 ロンドンの様態 給金問題

両者の比較からは、『航米日録』の要目が多岐にわたり、かつ詳細なこと、一方、『広八日記』は「言い難し」などの印象・概括表現に終わりがちで、簡単な記述が多い。言い換えると、『航米日録』は観察的・記述的、『広八日記』は直接的・概言的な傾向である。筆者らの性格を考えると、当然のことであろう。

すなわち、玉虫は各地の施設の観察的記録に徹する傾向が強く、例えば「驚く」項では、表1の内容を例にとれば、印刷所での蒸気力の活用、ハワイ「オアホ島」での世界地図が高額なことと、会った人物の識字能力の高さ、また各所での豪華な結構やしつらえに「驚き」、各種文物・事物の巧みさと機能的なあり方を詳しく記述することが多い。対して広八の「驚き」は、都市や施設の偉容もあるが「高く立派」とする程度、他には仲間の死、外国人との乱闘、スペイン

戦争で興行が出来ず市内が混乱していること、パリでの藩士高官からの維新戦争の伝聞などである。「仕掛け」でも、身近な道具やホテルの食事の仕組み—食事の時刻に遅れたら食べられない、時計を持つべし—、気晴らしに案内された遊園地の施設や動物など、身辺の経験による事柄が多い。「～難し」では玉虫の言う「機巧」と同じ対象物もあるが、巡業にまつわる問題が多く、「劇場」が使えないこと、「給金問題」に至っては、興行主の米人が経営につまった末の契約問題であり、また「言葉わからず」交渉が難渋することである。つまり興業中心の消息を綴るものである。

以下、この点を原文を挙げて比較する。まず、要目内容として厳密には共通しないが、太平洋をわたって最初に到着したサンフランシスコの様態につき、両者の表現特徴を見る。

上陸直後のサンフランシスコでの感想

『航米日録』

1. 予等上陸、乃チ馬車ニ乗り旅館ニ至ル、速ナルコト瞬息ノ間二十町余走ル。其間ノ風景何ヲカ見ルヲ得ンヤ、匆々ニ過ギ去ルノミ 卷2, 51 頁
2. 申後晩飯ヲ喫ス、何レモ花旗ノ割烹ニテ、味美ナラズトイヘドモ枳腹ヲ養フニ足ル。亦左ニ記ス。○乾蒸餅《乾キタルパンナリ》○氷水《右二品ハ初ヨリ卓子上ニ備ヘ置ク》○吸物《白色ノ大皿ヘ入ル、味甘クシテ臭シ、其品何タルヲ知ラズ》○鮭《アンカケニ似テ膏臭アリ》○牛《塩煮ナレドモ葛粉ヲカケタル様ニシテ味ヒ膏臭アレドモ食フニ足ル》○豚《五升芋ヘ小麦粉ヲ摘ミ入レタル物ヲ加ヘ何レモ膏臭アリ》・・・食セントスルトキ、是三品ヲ用ヒ箸ヲ用ヘズ。始メ口ニ合フ味一品モナケレド、是ヲ以テ常食トナサバ、穀食モ同ジカラン。・・・彼ノ食ト雖ドモ、飢渴ヲ凌グニ至テハ穀食モ同フシテ、唯慣ト不慣トアルノミ。外邦ニ来リ飲食ニ苦ムハ是井蛙ノ見ニテ、一步モ他ニ行ク能ワザル者ナリ。笑フベキコトナリ。志ノ士ハ必ズ此等ニ困スルコトナケン。卷2, 51 頁
3. 「家宅」 旅館ハ海岸ヲ距ル大略二十丁余ニシテ、町名 {チョキシソ} {ストレート} ト云フ。館名 {インキルネショナエル} ト云。頗ル巨大ニシテ高サ五層ナリ。毎樓房室数十ニ分チ、総計百三十六個アリ、皆寢床ヲ設ク。其寢牀サントウキスニ異ナラネドモ、幃上小円ニ括結シテ床ノ四方ニ張ル、其形如此シ。又卓子上ニ盥盤・大鏡・発燭子ヲ設ケ、更ニ烟盤或ハ茶湯ヲ出サズ、我国人ハ喫スル能ハズ。彼ハ平生巻烟草ヲ喫シ、渴スルトキハ水ヲ飲ム、故ニ如此シ。且何事モ便利ヲ主トシ、每房壁隔ニ銅線ヲ廻シ、是ヲ引ケバ忽チ僮僕応ジ来ル。楼下壁上ニ房数ニ応ジテ簷馬ヲ設ケ、幾番ト云順次ヲ小片板ニ記ス。上房ニテ彼ノ銅線ヲ引ケバ、簷馬忽チ鳴テ、幾番ノ房ニ用事アルヲ知ル。又毎樓銅管ヲ以テ水ヲ通ジ、常ニ螺ヲ以テ水口ヲ塞グ、用ユルトキ其螺釘ヲ廻セバ、水忽チ出ヅ。窓ハ皆玻璃、席ハ花氈、燈ハ瓦斯ヲ用ユ。是モ每房ニ銅管ヲ廻シ置キ、毎ニハ螺釘ヲ以テ其氣ヲ塞ギ、点ズレバ忽チ燃ル、其便利実ニ驚入ルナリ。楼下ハ食堂ニシテ、管店子〈パントウ〉毎ニ此ニ居ル、其長サ凡ソ十七間、幅七間許ニシテ、堂間三列ニ長キ食卓ヲ設ケ、卓ノ周囲ニ椅子ヲ並ブ。一卓ゴトニ六十人ニシテ、三卓合スレバ百八十人会食スベシ、盛ナル哉。卷2, 61 頁

『広八日記』

4. 廿七日一八時半時二三ふらんせしこいあがり候処、みなと壱つはいくものこをちらしたるごとくに、見物の人出候なり、しかる処、きん銀のぞふがんうちたる馬車五つ引きたり、それ二皆々打のりてはしるけしきハ、日本にてハ大名もおよバぬ事也、やとやいまいり候なり、廿九日一三ふらんせしこ見物に出候処、きれいな事、はなし糸にもかきがたし、家ハ五かい又は七かいにして、皆石二てつみあげたる作也、又かわらにて作りし家もあり、猶又水のしかけ、ひのしかけ、車のしかけおとろき入るなり、それより又町道りのよふたいハ、両川（側）三間ハすき石にてつめもたゝぬすきずめ、又中道り三間ほとはくるま道にて、小石二て石たゝき、又黒かねにてふたすじあり、是はせきたんおたきてまはる上き車の道なり、ま事二物ておそれ入、見物致候なり。6頁－慶応2年11月29日条

玉虫の場合は、記述が詳細である。1. は馬車の速さを、回りの風景が見られないほどであるとする。2. では、彼にとって珍奇な食事内容を詳細に記し、その一方で、使節団の幾人かが不平を口にしたのであろう、井蛙にとどまっては進歩が期待できないと、暗にその態度を批判する—この批判は巻「8. 秘書」とされる箇所ですらに明確に現れてくる—。3. は、多くの施設を具体的に記述し、器物だけでなく「是ヲ引ケバ忽チ僮僕応ジ来ル」とサービス面にも着目している。漢語を多用し、事実即して記述し、時に分析的な感想を添えつつ簡潔な表現に徹している。

4. の『広八日記』の引用も、類似の内容を述べる箇所である。内容は、出迎えの盛大さ、夢のような豪華な馬車に乗り「宿屋」に向かったこと、その「宿屋」が石造りの高層で、水道、ガス灯のすばらしい施設であること、鉄路をそなえ馬車・蒸気車も通る「道通り」などを「恐れ入りて見物」したことが、驚きをもって書かれている。「誠に以て恐れ入り、見物致すなり」とするのは、新奇な事物を具体的に体験した者の心底からの驚嘆であったろう。

両者を比較すると、玉虫は漢語中心の簡潔で事実重視の表現であり、広八は、型どおりの「候文」をめざすが、一方では当て字を多用し、表現は日常和語によっている。この違いは用語にも顕著である。引用3. でも玉虫が「家宅」「旅館」を使うのに対し、広八は「やどや（宿屋）」「家」であり、同じく水道・ガス灯なども、玉虫は「銅管ヲ以テ水ヲ通ジ、常ニ螺ヲ以テ水口ヲ塞グ、用ユルトキ其螺釘ヲ廻セバ、水忽チ出ヅ」と、「水道」の語は使わないが詳細に述べる。広八は「水・火・車」の「仕掛」と平易に概括するのみである。

しかし、この違いを超えて、記述される諸物に共通点も多い。これは文明開化が先行した米欧でまず目につくものであり、当時の日本人が共に注目する当然のものであったに違いない。

なお、玉虫も広八も、サンフランシスコを「サンフランシコ」という形式で表している（表記は、玉虫はカタカナ、広八は「三ふらんすしこ」）。これは彦坂（2004a）で述べたように、彼らが南奥羽方言のもつズーズー弁がかった発音を保持していたからである。広八の場合、「すきずめ」も『（街路が石で）敷き詰められている』意味である。彼らは「イ」と「エ」の区別も不安定である。知識人たる玉虫にして各所にこうした表記が現れることは、直筆本文でも確認出来て、これらの方言傾向が成人しても抜けずにあったことが分かる。

「車」の記事—機巧の代表例

次に「車」についての記述を見る。彼らが特に目を見張った第一のものは蒸気車・蒸気船であつ

た。表1の「機巧」の項目はこれらの関連事項で占められ、表2の「仕掛け」にも出てくる。蒸気車の模型はすでにベリーが日本にもたらしていたが、一般にはまだ認知されていない。ただ、玉虫の場合、蒸気車に代表される「車」はたんなる交通手段のそれではないことに注意したい。

1. 蒸気車—蒸気車ハ強圧力三百馬力ニシテ、大車四輪ハ前ニシテ小車四輪ハ後ニアリ、器械ヲ其上ニ設ク。蒸気管ハ後ヨリ火ヲ焚キ前ニ烟筒アリ、管ノ左右ニ気筒《諸管ヘ蒸気ヲ通貫〔スル〕器械ヲ云フ》ヲ設ケ、夫ヨリ鉄棍ヲ出シテ前後ノ車ニ接シ、蒸気其管中ヨリ左右ノ気管ニ通管シテ鉄棍ヲ動かセバ、大車四輪皆運転シ、余ノ小車從テ転廻ス。第一車上蒸気管ノ右ニ我国ノ旗号、左ニパナノ旗号ヲ建テ、中央ニ花旗国ノ旗号ヲ建ツ。又少許後ニ隔テ半鐘ヲ設ク。是車ノ進退暗号ノ為ニ是ヲ打ツナリ。又少許後ニ於テ半鐘ノ如ナルモノヲ設ク、蒸気是ニ触レバ猛烈ノ声出ヅ。是車路高低屈曲ノ節、暗号ノ為メ是ヲ鳴スナリ。第二車ハ小車四輪ニシテ、上ニ薪水ヲ貯フ。第三車ヨリ皆長サ八間許・幅八尺計・高サ六尺許ノ屋台ノ如キモノヲ、小車八輪上ニ設ク。総計六個ヲ接続ス。其接際ハ前車ノ後、後車ノ前、各中央ヨリ幅四寸許・長サ六七寸許・厚サ一寸許ノ鉄棍ヲ出ダシテ、各一寸五分許ノ孔ヲ上下ニ穿チ、其中ヲ丸キ栓ニテシメ置ク、是屈曲自由ナラシムル為ナリ。又左右兩端ヲ鉄鎖ニテ繋ギ、車路屈曲ノ所ニ至レバ、其所ニ從、鉄鎖屈伸シテ、進退更ニ逗滯セズ。・・・(中略)・・・且ツ車路大抵一道ナレド、パナマ、アスベンワルニ至リテハ五道ニ分ツ。而シテ其傍ニ伝信機ノ銅線アリ。二間余ノ木材ヲ一町許隔テ・建ツ、其上ニ鉄釘ヲ打ち、夫ヘ青色ノ玻璃ヲ設ケ、銅線其中ヲ通貫ス。之ヲ以テ互ニ応酬シテ、預メ往来ノ期ヲ知ラシム。故ニ兩車相逢フノ患ナシト云フ。扱車歩速ナル、左右樹木アレドモ認ムル能ハズ。車声ノ喧キ怒雷ノ如ク、兩人相對スルモ言語了々ナラズ。而シテ行走ノ平ナル、安然坐スルガ如ク、文字ヲ写スコトモ為スベシ。時ニ硝窓ヲ開ケバ涼風前面ヨリ吹き来リ、如何ナル炎暑トイヘドモ覺エザルナリ。其奇巧ノ精密唯ニ驚キ入ルノミ。巻3、79頁
2. 今日はりしにおいて、町家のこらすのうち、皆土下壺丈三尺ほどしたを、皆ごはんわりにはりぬき、此はりぬきハあく水・清水のかよいあなにて海い皆ながれたす、水又ハごみぬきあななり、是もあなまはりハ皆石にてつみあけおくなり、是見物ニまいる道ハ猶又きれいなるあななり、三間ほどの川はゞにして、まわりハつめもはいらぬ用ニ大はんぢやくにつみあげおき、なか壺間ほと水のなかれるほりなり、是もそこふちまで皆石にして、其ふちハくろかねにてすじ両かハにあり、是ハ上き車のあるく道なり、川をまたきて上き車つうごうするなり、此き車ニのり見物致候なり、処々にけいすのあかりあり、日中よりまだあかるき事也、なん時此口よりはいいり、又どの口いなん時てるときまりあれハ、なかにてつきあたるとゆふ事なし、ところ＼／にてういの上き車又ハ馬車あるくおとほのかにきこゆる、足もめつらしきあな也。慶応3年30頁－7月18日条

1. の玉虫のものは1千字余りと長い「蒸気車」の記事、その冒頭と末尾の部分である。前半ではその構造と機能をとこと細かに記述し、しかもその結構（仕組み）のあらましを理解している。後半ではパナマ運河はまだ無くて、陸地を鉄道で行くこと、複線であり電信機で調整して運行すること、その早さのために景色は見えず、轟音で話が聞こえないものの、滑るように走って

運筆も可能、ガラス窓を開ければ涼風が頬を撫で、暑さを忘れる、何という精密な機構であろうか、と驚嘆している。その驚嘆の中に、鋭く冷静な観察眼の潜むことも玉虫らしいところであろう。

2. は広八の場合である。街路にある鉄路など、蒸気車を取りまく施設面は時々記されている。上に引いたものはフランス、パリにおけるトンネルの記述であり、それを「穴」とし、石を「盤石」に積み上げ、水路を「堀り」とし、線路は「くろがねの両筋」、トンネル内には「ケイス」つまりガス—これは耳で聞いた英語、おそらく通訳のバンスクか誰かによるのであろう—の灯火があり、また通過時刻が決まっていたトンネル内で衝突することはないことなどを「珍しき穴」という日常表現でまとめている。広八が「蒸気車」に触れるところは、「九つ時ニ此処を出立て、すべりや（セビリヤ）と申処い上き車ニてとふか事く（如く）にはしる」（スペインでの記述）と、「飛ぶよう」とある概括的な表現に過ぎない。通常は「道のり六十里ほととの処を上き車と申くるまのり、三時ニてまいる」（パナマの半島部分を越える時の記述）のように、珍しいが、特にその内実に注目することはない。

これが、玉虫の場合は、特に「車」の「機巧」についてその深い意味を認めるところが注目される。

3. 凡テ車ノ機巧ヲ用ルモノ多シ。蒸気車ニテ万里ノ波濤ヲ平路ノ如ク渉ルハ勿論、諸物ノ運送皆車ヲ用ユ。予ガ見ル所ヲ以テスルニ、活板ヲ摺ニモ是ヲ用ヒ、又縫針ノ小事ニモ是ヲ用ユ。然ラバ事ノ便利ハ車ノ機巧ニアリト知ルベシ。巻1, 30 頁

4. ネヒヤルー（軍船製造処ナリ）ニ至ル。・・・扱其製造ヲ一見セシニ、何レモ蒸気ノ機巧ニテ更ニ人力ヲ用ヒズ、百人許ノ業一兩人ニテ成ル。其精密ノ奇巧、一見容易ニ解スル能ハズ、今一二ヲ摘ミ述ブ。鉛丸ヲ作ルヲ見ルニ、円鉛棍ヲ順次ニ鉄範ヲ以テ上下ヨリ打ち固ムレバ、（正面）、（側面）如此キニシテ円丸ヲ成ス。又是ヲ截落スル具アリテ、倏忽ノ間数百丸ヲ成ス。・・・外激発丸ノ鑄造、木材ノ鋸鑿、皆蒸気車力ヲ以テス。又巨鏡ヲ伸縮スルニ、百人力許ナルヲ一兩人ニテ自在ニス。蒸気ノ便利如此ニ至ル、其国ノ富有ナルヨリ生ズ。巻3, 102 頁

5. 凡テ車ノ機巧ヲ用ルモノ多シ。蒸気車ニテ万里ノ波濤ヲ平路ノ如ク渉ルハ勿論、諸物ノ運送皆車ヲ用ユ。・・・然ラバ事ノ便利ハ機巧ニアリト知ルベシ。巻2, 17 頁

3. は「車」を、回転する動力のようなものと捉えている。それによって、表1にも挙げた、蒸気車は勿論、印刷、縫製といったものの製造過程を支えていることを述べる。4. は、海軍造船ドックの観察で、爆弾、弾丸、その他の製造に「蒸気の機巧」が使用されていること、その仕組みは理解を超えるとするが、蒸気力が「国の富有なるためにあり得る」とする。逆に言えば、このような「車」の活用が国の産業の源であることの理解にも届いている。玉虫は使節団長に扈從する役であり、自由な外出は制限されたが、制約された中での直接的な見聞は勿論、使節団員の見聞をもとに、また関連事項を専門知識を有する同僚藩士に問いただしたりして、詳細な記録を集積している。帰国後の整理によって加えられた内容もあろうが、希有な機会を最大限に生かし、何事にも関心をもち、記述し、その意味を探る強い意欲をもっていたことが窺わ

れる。これに対し、広八は巡業を第一とし、その目的遂行の中で出会う様々な出来事や出会いを、概言的にはあるが、生き生きととらえている。

3.2 今日的な語彙形式への過渡期の面

この見聞記の時代は、明治以降のいわゆる近代語の成る前夜に当たる時期である。以下には、この点から、現代的な語彙表現が成立する過渡期の模様を考えてみたい。先の彦坂（2003）では、日曜日ないし休日の「ドンタク」、「シャボンと石鹸」、「プランケット」、「金座・銀座」、「蒸気車・蒸気船」、「飛脚船」などを、やはり『航米日録』と『広八日記』とで比較検討した。以下にも二三、同じような語群をとりあげてみる。

〈日曜日〉を意味する語

以前の考察は『広八日記』を主とした。今回は『航米日録』について考え、比較する。

『航米日録』で〈日曜日〉を意味する語は、「日曜日」「ソンター」の2表記である、合わせて20例余り現れる（ソンターの表記は、玉虫は濁点表記は任意のようであり、この場合はまず点けられていない。恐らく発音はソンデーであったろう）。記述順に従えば、先に「日曜日」が現れ、初例は、巻2、10頁「又日曜ニハ船中ノ者各衣服ヲ改メ宗法ヲ」と、太平洋上のポーハタン艦上での米人の日曜礼拝の説明に使用される。次いで「ソンレー」が巻2、66頁に「廿六日晴、東北風又東南ニ向フ。風止ミ波平ニシテ帆ヲ揚グル能ワズ。今日ソンター<日曜日ナリ>。」と、初めて現れるが、直後に注として「日曜日ナリ」とあり、まだ目新しい語形であることが分かる。一週7日制の「日曜」の表現自体は江戸時代には知識としてはあり、玉虫も「日曜日」は漢語表現を通じて既得のものであったと考えられる。続いて現れる「ソンター」の場合、必ず「今日・今日ハ」の表現が先行しており、日並みの日記風の文面が中心であることも注意される。巻2の続く3例とも「ソンター〈日曜日ナリ〉」と、注記付きの文脈である。続いて再び「日曜（日）」が巻4、113頁に現れるが、「釣り燈籠兩三ヲ設ケ、下ハ皆板敷キニテ、机案ノ如キ長キ椅子ヲ数十備ヘ置ク。是、日曜ニ当レバ教法ヲ説キ示シ、或ハ右「ヲウーゲン」（オルガン）ヲ弾ジテ衆人ヲ慰メシムル場ナリ」で分かるように、「（旅館内の）教会風の独立した建物」に関する説明として使用され、日付の下に出来事を記す「ソンター」とは違っている。続いて、後半の巻5、136頁になると、「七日晴滞留。今日ハソンターニテ市中商売ヲ休ム。午後三階上ニ至ル。」のように、ソンターが注のないまま、しかしやはり「今日ハ」と日記記事として現れてきて、ソンターが身近な形式になったことを感じさせる。一方で以後、2例「日曜日」が現れるが、いずれも説明的な文言に現れることと同じである。曜日の記述が起こるのはポーハタン船上の米国の領域になってからであり、その中で、説明的記述には既存の知識としての語「日曜・日曜日」、日並みの記録には「ソンター」がまず注「日曜日」付きで導入され、やがて独り立ちするという格好で使い分けられている。

『広八日記』については前に見た。「とんたく」「そん礼」の2表記があり、それぞれ「ドンタク」「Sunday」を表すものである。ドンタクはオランダ語移入の「日曜日」の意味で、近世の庶民に膾炙した形式であった。日記の中では、ドンタクが出発からニューヨークまでと、欧州の始めのフランスで暫く、そして帰国の洋上で使用され、それ以外は欧州も含めて「そん礼」が使用

されている。英語圏に慣れるまでは日本的なドンタク、やがて英語を耳にして「そん札」に変わり、欧州での非英語圏で一旦ドンタクに戻るが、やはり「そん札」が多く、やがて帰国途上には再びドンタクとなって、使い分けていることを述べた。現地語を耳にするに従い、それに倣っていく様子も現れている。ただ、広八はドンタクを「休日」の意味にも使い、原義を拡張している。さらに、休日などを利用してであろうか、連続興行のようなことも、例えばスペインで「牛殺し—闘牛」が連続して数日行われることを「三どんたく、四どんたく」などとしている。また、日記の日付では、日曜日の日付の頭に「●」印をつけており、体裁の説明でもこの印について断っている。これは興行日程が日曜に多い事とも関連して、嫌でも曜日を意識する必要があったからであろう。当時の日本では7日ごとの週の意識はないはずであり、現地になじんでからの意識化に違いない。

広八と玉虫を比較すると、日本にはその習慣がなくて、共に米国の領域になって〈日曜日〉ないし曜日を意識したと考える。一方、違いについて、広八は庶民的なドンタクと、耳から獲得したのであろう「そん札」とを我が身を置く言語圏や集団に即して使用するのに対し、玉虫は、漢語「日曜・日曜日」を説明の記述に、「ソンター」を日並みの記録にと、用途に即して使用している。今日では結局「日曜日」が定着するが、日常に定着するのは、学制にともなっていることであろう、明治期以降のことである。

〈ホテル〉を意味する語類

〈ホテル〉は、『航米日録』の場合、漢語「旅館」がほぼ専用されており、次のような例である。

1. 旅館ノ止宿賃一人ニテドルラルト云フ。巻1, 32 頁
2. 旅館ハ海岸ヨリ相距十六七丁ニシテ仏蘭西旅館ナリ。都テ煉瓦石ヲ畳ミ、外白壁ヲ塗り…
巻1, 41 頁
3. 其他皆旅客ノ止宿所ナリ。大抵一房一間半或二間ナリ。巻7, 198 頁

「旅館」にまじり1・3のように「止宿」もあるが、これは一般の〈ホテル〉の意味よりも「泊まる」という動作性が強い。なお「ホテル」は使用されておらず、2のように外国のそれでも「仏蘭西旅館」と「旅館」が普通である。

これに対して『広八日記』では、かなり事情が異なる。多くは「やどや」「やとや」表記で、いくらか「泊屋」などもある。

4. 三日此日私き役人付そい町見物に出候。猶又めつらしきやとやの家作、五十間四方程にして七かいの家也、下式かいハ、まはりのこらずあきないみせにかしをき候なり、上五かいハやとやのきやく座敷なり、14 頁—慶応3年2月3日条
5. (巾着を)ぬすまれたる処のしかた(身振り)をして申けるハ、やどやをよび出してきんみくたさる用と申あけ候いハ、50 頁—慶応4年4月8日条
6. わしんとんい付、馬車にて泊屋いまいり、皆々きうそく致候なり。15 頁—慶応3年3月4日条

7. 廿七日今日荷作致夜四つ時ニ此処出立て、ぼうてもうる（ボルティモア）と申処いまいり候、五十九りほと道の道をあけ七つ時行、泊屋にて皆々、きうそく致なり。16 頁－慶応3 年2 月29 日条
8. 此日くれ六つ時ニばれんすや二つき、きせんやとのよふなるやとや二とめられ、皆々はらを立てとまるなり。66 頁－慶応4 年8 月24 日条
9. 長州御家老様の処いまいり右のしたい申上候、しかる処おふきによろこひて、・・・とこまでもつよくかけあいとゆはれてやといもとり、明日をそしとまち、いよ／＼今日役人四人付て女われべんくつ七人にてまいり候処・・・54 頁－慶応3 年4 月8 日条

4. は「やどや」の構造について、5. は「宿」の主人を言うが、全体には泊まる行為をする場所の用例がほとんどである。また、6・7 のように、「泊屋」時に「泊や」の表記が数例ある。やはり「宿泊場所」の意味と思われ、「やどや」と特に違いは見出しにくい。あるいはこれでヤドヤと読ませる意識かも知れない。8. 「きせんやど」も1 例あり、通常より特に貧弱な「宿屋」の文脈で使用されている。これは「木賃宿」の誤用ないしズーズー弁的な発音が関与するのかも知れない。最後に9. の「やど」も幾らかあり、これは「宿に戻り」の文脈ばかりで、「滞在している所」くらいの意味であろう。全体には、和語「やどや」によることが特徴である。玉虫と異なり、広八はこうした日常語による記述がもっぱらであり、知識層と庶民層の違いを語るものであろう。なお、『航米日録』『広八日記』ともに、ホテルの語は現れない。同じ使節団の村垣範正『遣米日記』には「ホテル」の語があるが、やはり「宿舎」と注付きであり、この語が一般に使われるのはもっと後である。今日でも、和風の場合は「旅館」、洋風を「ホテル」として区別がある。

〈ドル〉

この意味の語は、『航米日録』は次の1. のようにドルラルで、すなわち英語が隆盛する以前のオランダ語読みの形式である。また別に「～円銀」という表現も使用している。それに対し、『広八日記』は、2・3 のように「トロ」表記で現れ、恐らく「ドロ（一）」と発音したのではないか。玉虫が江戸時代の蘭学による知識人的な形式を採用しているのに対し、広八の場合は、耳で聞いた英語をそのまま転写するような形で記録したものとする。耳で聞いた外国語の表記法もどのような特色があるかを知りたいが、またの機会とする。

1. 旅館ノ止宿賃一人ニテドルラルト云フ。而シテ飲食ハ自分ニテ俱ルナリ。又浴湯ハ総計四桶ニテ、一桶ドルラルニ当ルト云フ、又四桶ニテ五ドルラルトモ云フ。予管セザルコトユヘ詳ナラズ。唯其費ノ多キ以テ知ルベシ。巻1, 31 頁
2. 十一日今日皆々銀ざ見物ニまいり候処、家作四かいにして、猶又それ／＼の役人八九十人も相みい候なり、安内の異人付そい、道工又ハトロふく処金銀ののへがね、なに程か相しれず、8 頁－慶応2 年12 月11 日条
3. 廿五日此夜女郎かいニまいり、勤代トロ五枚日本そうハにして金五両なり。29 頁－慶応3 年7 月25 日条

〈ガス〉

『航米日録』では、「ガス」3例のうち2例が「～と云う」の表現が後接している。これは原語での言い方を重視したもので、しかしまだ紹介的筆致である。対して多く例のある「瓦斯」は事象の説明部分に多く、かつ「瓦斯管」「瓦斯燈」など漢語の複合語が多く、両者を使い分けている。対して『広八日記』では、サンフランシスコ上陸直後の「宿屋」の「火の仕掛け」に「息のかよう道／風」といった文脈の中での「息・風」として、日常の代替表現でまかなっている。1例ある「げいす」はフランスでのトンネル内の灯火の説明に使用されるが、英語を耳で聞いて直感的に真似た表現であり、英語に接した後の例であることが注意される。フランスなのに英語形式なのは、同行する米人通訳の表現を受けたものであろう。幕末期、庶民はガス自体の存在にうとく、欧米での聞き真似か、即物的な類似表現で代えたのである。これに対して、玉虫は知識としての瓦斯は漢籍などを通じて既知のことであったと思われる。

この他、今日的な表現の過渡期のものとして、『航米日録』では「時計」より「時規」表記が多かったり、「新聞」は「新聞紙」であったり、『広八日記』では「動物園」を「獣屋敷」としたり（「動物園」は福沢諭吉のものに見えるが、一般にはまだ後である）、と言ったことがある。「銀行」などの用語もまだ採用されていない。ただし「為替」は、その機能を採用してかなり早くにある。これらも含めて、過渡的語彙の総合的な洗い出しは今後の課題としたい。

4. 『航米日録』と『広八日記』の注目点

最後に、両記録のそれぞれの注目すべき点に触れておく。

『航米日録』の巻8の「秘書」とされる巻に、今までの観察的記述をこえた、彼の使節団などについての率直な批評が聞け、異質の巻である。この巻が「秘書」とされたのも故無しとしない。『広八日記』は、彼の私見は「驚き入る」「言い難し」との標語で片付けられ、分析的深化のない点に物足りなさを感じるが、一方で具体的体験にもとづく意見の吐露には注目すべきところがある。これらの点を二三あげておきたい。

『航米日録』巻8の率直な批判精神は、次のような点によく表れている。米国軍艦の士官・水夫たちは上下の区別なく親しく交わり、しかし規律を忘れないとの記事を載せたあと、日本側の態度について、次のように言う。

彼ハ・・・船将・士官ノ別ナク上下相混ジ、水夫タリトモ敢テ船将ヲ重ズルコトナク、船将モ亦威焰ヲ張ラズ、同輩ノ如シ。唯其情交ニ至リテハ極テ親密ニシテ、万一事アルトキハ各カラ尽シテ相救フ。苟モ凶事アレバ、涙ヲ垂レ悲嘆スルニ至ル。我国ニテハ礼法愈厳ニシテ、従臣ト雖ドモ容易ニ御奉行ニ拝謁スルヲ得ズ、其威鬼神ノ如シ。是ニ従テ、其下少シク位アル者ニ至ルマデ大ニ威服ヲ張り、各其下々ノ者ヲ蔑視ス。其規格ハ如何ニモ厳ナレドモ、情交日ニ薄ク、縦ヒ凶事ナドアレバ外面ニテ悲嘆スルノミ。上下ノ間此ノ如シ、万一緩急アラバ、誰レカ力ヲ尽スベキヤ。是昇平長ク続キタル弊ナラン・・・歟、慨嘆スベシ。礼法ヲバ厳ニシテ、夷俗ノ相蔑視スルニ至ラズ、交情ノ厚薄ハ彼等ノ如ク、両ツナガラ宜ウスルノ道ナカランヤ。予敢テ夷俗ヲ貴ムニ非ズ、今日ノ事情自ラ此ノ嘆息ヲ

発セザルヲ得ズ、第8,237頁

玉虫は、初期にはかなりの思い込みからであろう、米語を「夷語」、米人を「米夷・夷人」、その音楽を「胡楽」などとしている。それがやがて、船上で士官・水夫たちの行動を目の当たりにし、次第に評価を変えて行く。しかし、なお、「然ラバ夷人トテ漫ニ卑下スルモノニ非ズ。此等ノ人ニテモ、聖教ヲ施サバ必ズ礼義ノ人トナラン」などの言辞もあり、全面的に態度を変えたわけではない。上の引用でも、船上の士官・水夫たちを「夷俗」としている。しかし、その態度には高い評価を与えるようになる。そして返す刀で日本使節団側の、情の通うことのない硬直した上下関係に鋭い批判を加え「嘆息せざるを得ず」と記す。巻7以前の筆致とは異なり、やはり米国を見聞しただけのことはある意見であろう。

『広八日記』の場合は、彦坂（2003）でも触れたが、また庶民的な事件の当事者になることで、裁判を身近に経験することとなった。ロンドンで「女郎」を買った際に、宿で財布を抜き取られる。そこには「三十三両三分、此かねの名をいきりすにてハないはんと申なり」—広八によれば900ポンドの金が入っていた。警察に訴えるが、初めは取り合ってくれない。知り合いになった長州藩の役人にも助言をもらい何度も迫る内に、やがて数度にわたる犯人探しの面通しとなる。その三度目、前と同じ女が服装を変えては出てくる。それを見とがめて、『うなじ』一項を調べると、見覚えのある「生え際のどやか」な風であった。こうして警察も納得する犯人を探し出すのである。この間の経緯を次のように記す。

わだぐし此度ニて三たびの処御さしかみにてよび出され候処、始より三たびなから此女にあらすと申てかいせ共、又しようぞくをかいふりをか三たび共に此処いてる女なれハ、此女きようしようこのみでの事か、又日本人をばかとして役人のわざか、是ハいかゝなるやと申あけ候、此時役人申けるハ、それニてかねを取し女ハわかり候、此義ハそことも年よりゆい目たがい致し、とがなき女ニなわけ候いハ、そのとかとして其方ニなわをかけるか国法、それゆい目たかいなきしるし、同女三たびだしたり、此方よりたゝすへきと思ヲうちよくもみをほい申上たり、それでこそ此女にちかいなしとすくさまかな手ちよううち候なり、此時われもなるほと、かんち入おそれをなし候、是まてはたゝばかにされると思ひはらたち候共、むねはれてみれハなる程異人よりわれがばかニて候、54頁—慶応4年4月8日条（実際にはさらに後日の体験）

ここで警察の慎重な態度の理由に改めて思い至るのであるが、注目すべきはその先である。裁判が始まった、その顛末は次のようである。分かりやすく翻字する。

大御番所にて黒金作りの門にして、大きなこと見上げる程あり。また、中の美々しきこと、恐ろしや。また、三段に致して、上の段に年頃48、9と見える吟味の役人に年頃48、9と見える吟味の役人一人、向こう一目に見下ろし控えたり。また両側に一段に一人つづ控えたり。これは口書きをとるようなる役もあり、また利害を言うようなる役もあり。また咎人の見方となりて利害を言う役、また願人の方になり利害を言う役もあり。なかなかもつ

て無益の罪に落とすなどと言うようなことは少しも無き。願人は末座（原文「ばつさ」）に腰をかけ居るなり。相手方はその後ろに立ちて居る。また願人も極めのつく時の掛け合いは、黒金にて四尺高さほどの鳥かごの様なる物の中に入りて、掛け合い致すなり。段々吟味の上、女「ほうまんつ」の牢舎となり、この「ほうまんつ」と申せるは、日本にて四ヶ月のことなり。また日本人故、牢より上がりて百日牢屋の使いをさせるなり。役人申すよう、日本人また疑いもあり一らんとて、牢屋までよく案内つけて見せる。この女、田舎生まれにて、ロンドンにては家も親類も何も無き故に、盗まれし金は少しも返らず。これ残念故にすぐに申しあげる。さて、日本にては十両とまとまりし金を取り候ならば首がなし、これだけの金を取りて、四月百日の牢舎にて済むことならば、我、国に戻りて倅どもに言いつけ、異人イギリスの人、見るならば幾らでも泥棒致し、四ヶ月の牢舎いただき候と申しあげれば、役人申す様、不憫なれども国法なれば是非無し、あきらめと、事やわからに通事をもって申しわたされ、これも是非無しと思ひ候なり。何事もまた書き物にて相分からぬことあり。右はかくのごとくに御座候ふ。55 頁～慶応4年4月8日条

訥々とした書きぶりに反し、よく見て、己の主張もしている。はからずも英国で身をもって裁判を体験したのである。その場のいかめしく、しかし事は公正なこと、日本のように間違えて咎人となるような恐れのないシステムに感じ入っている。

ただし、結果的にはそれだけのことであり、彼の内面は何も変わらず、帰国して元の庶民にもどったことは残念なことではある。

以上の箇所には、玉虫、広八、それぞれの体験にもとづく個性があらわれているように思う。

5. まとめと今後の課題

以上、幕末の知識人による『航米日録』と庶民による『広八日記』を比較しながら、その言語文化面を主として見てきた。近代前夜の洋行記録として、新奇な文物・事物を異なる文体や態度で記したこと、しかし一方では共通する対象の記事も多く、当時の日本と欧米の文明開化の違いによる共通面があること、日本における近代前夜のことばとしては、漢語と和語による表現の違いはあるが、今日的な語彙形式に至る途上の形式が多くあったことを見た。

今後も語学面をその文化的な環境の下に捉える視点を続けてみたいと思う。こうした資料の漢字・漢語・表現法を、他の遣米・欧資料とも比較し、近代的な日本語へと近づきつつある模様を探り、さらには明治以降の同類資料による今日への変化模様をとらえてみたい。

現今の知的用語は漢語・外来語による面が多く、それは明治の文明開化期に、漢語による翻訳や原語の移入によって成立した。翻訳の背景には日本側の漢語の知識があり、日常和語がこうした知的語彙群に置き換わっていくことになった。そうした研究は既に多いが、外国見聞記という範疇を通してこうした動向の具体的な模様を探る必要はなお残っている。

引用・参考文献

佳知晃子監訳（1984）マサオ ミヨシ『我ら見しまに一万延元年遣米使節の旅路』平凡社

沼沢次郎・松沢弘陽編『日本思想大系-西洋見聞集』

彦坂佳宣 (2003) 「ある幕末庶民の米欧体験」 論究日本文学 78

—— (2004a) 「近世末期『広八日記』の音韻表記—南奥羽方言資料の可能性— 立命館文学 583

—— (2004b) 「東北人による『広八日記』『桑名日記』の合拗音表記—近世末期南奥羽地方の合拗音の残存可能性」『飛田良文博士古稀記念論集』 ひつじ書房

三原 文 (1990) 「軽業師の倫敦興行」 芸能史研究 110

—— (1994) 「米国興行に賭けた芸能六座の動向」 芸能史研究 127

—— (2008) 『日本人登場—西洋劇場で演じられた江戸の見世物』 松柏社

宮永 孝 (1999) 『海を渡った幕末の曲芸団』 中公新書

「付言」『航米日録』のテキストファイル化は大阪成蹊大学名誉教授・浅野敏彦氏によるものであり、それを同志社大学教授・石井久雄氏が調整したものを使用した。『広八日記』のテキスト化は彦坂による。また、本稿の内容は昨年度から継続している「外国見聞記の語学的研究」の会で刺激をうけて成った。KH Coderについては樋口氏から教示を得た。本稿の責は彦坂にあるが、ともに感謝するところである。